カラフル

椎名美月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
カラフル

【Ｎコード】
Ｎ７３５５Ｉ

【作者名】
椎名美月

【あらすじ】
カラフルなハルと、モノクロのゆずは。
光におびえるゆずはと、ゆずはに一直線に想いを寄せるハルのどこまでも純粋で、ちょっと切ない恋。

1：危険な狼

あたしは昔から自己を確定できない人間だった。
もともと自己表現とかできない、どちらかというとおとなしめで、いるかいないかわからないくらいの影みたいな存在。
あたしの見ている世界は決して明るくもないモノクロだけれど、でもそれは一番身の丈にあっているんだと思っていた。
別にそれに対して不満を抱いてはいなかった。それがあたしなんだろうと、高校二年生にもなったあたしはそれを理解していたし。
何より自分で引いた境界線に誰かが侵入するということが生理的にいやだった。

だけど。

「ゆずはーー」

あたしの引いた境界線にずかずかと無遠慮に入ってこようとする人間が約一名。
時間帯はもうすでに放課後。最近のあたしの日課は授業が終わって即効で学校を出ること。
そう、誰よりも早く。

「おい、待てって。おーい無視するなよ」

無視をすればするだけしつこく追いかけてくる声。
自然とはや走りになるあたしの足。
だけど身長的にもスピード的にも、小柄な女子のあたしが勝てるはずもなく。

「一緒に帰ろう！」

ぐい、っと肩を引っ張られて思わず後ろにこけそうになった。
まるで抱きしめるかのように、あたしはその人に支えられる。

きっと見えあげてにらんだ顔はいつものニコニコ顔。
あたしがどんなにいやそうな顔をしても、作ったみたいなその笑っている表情は決して崩れることはない。

「お、岡野君。支えてくれてありがとう。そろそろ離してくれないかな」

周りの視線がいたい。
もちろん廊下のど真ん中でほぼ抱きしめあっているような格好でいるのは注目を浴びる。
それ以外にももちろん理由があって、それがただのクラスメイトだとかだったら冷やかし程度で済むのだろうけれど、何しろ相手が悪い。

「やだ。今日こそ俺と帰ってくれるよね？　この間『また今度ね』って言ったから我慢しておとなしく帰ったんだぜ？」

まるで犬や猫に声をかけるような甘い声色。
そのたびにちくちくとさすような痛い女子の視線。
それもそうだ。なんせあたしには一番遠い、カラフルな世界に住む男の子がモノクロのあたしに構ったりしているから。

「ご、ごめん、今日は用事があって」

「どんな。また？　いつもゆずはは用事とかだな」

その腕から逃れようとすればするだけあたしを押さえ込む岡野君の腕の力は強くなる。

まるでもがけばもがくだけはまっていく穴のようだ。

「な、なんでもいいでしょ。ていうか、そろそろは、離して」

われながら嫌がる声が震えているなんてちょっと情けない、なんて思う。

「やだ」

だけどもちろんそんなひるんだような言い方で彼が離してくれるはずもない。

大きく息を吸うと、あたしは口を開いた。

「いい加減離して。今急いでるの」

自分でもいやになるくらい冷たい声だと思った。

だけどからかわれて傷つくのはもうごめんだ。

どうせモノクロのあたしをからかっているだけ。期待なんかしちゃいけない。
カラフルとモノクロは決して混じることのない平行線で、一生分かり合えないんだ。
それをあたしは何よりも。誰よりも知っているつもりだ。

珍しいあたしの冷ややかな声に岡野君の腕の力がひるんだ瞬間、その間をすり抜けると一直線に玄関へと向かった。
後ろからあたしを呼ぶ声が聞こえたけれど。それにも応じないフリをして。

――お願い、近づかないで。

あたしの境界線にこれ以上踏み込んでこないで、そう思いながら。

危険な狼（カレ）には要注意だ。

1：危険な狼（後書き）

以前書いた文を修正してうpしました。
だいぶ内容は変わってしまったのですが、おおまかなストーリは一緒かと^^；
よかったら最後までお付き合いください＞＜
感想や批評もよろしくお願いいたします。

2：キッカケは些細なこと

憂鬱だ。

それもそう。だって毎日ああやって彼の手から逃げなければならないのだから。

奴はいつだってやってくる。放課後じゃなくても朝だろうと休み時間だろうと関係なくやってくる。

そのたびにあたしは逃げ回らないといけない。

カラフルとモノクロの世界は違うんだ。だからお願い、それ以上あたしの中に入ってこないでと思いながら。

「はぁー……」

朝学校に来て発した第一声がこれだというのもちょっと虚しい気がする。

「ゆずはーおはよう。なんか疲れてるね……」

「あぁ、うん……まぁね」

後ろを振り返るとあたしの友達の中でもっとも情報通、そして親友の真紀が立っていた。

彼女もまた、カラフルの世界の住民だった。

華やかな女の子たちの中で取り巻かれている彼女はあたしにとってとても一番遠い存在で、あこがれているわけじゃないけれどちょっと一目置くような子だった。

ある日突然、そんな真紀に声をかけられて

『空笑いとか疲れるんだよね。だから友達になろう』

なんてあたしには理解しきれないことを言われて、今じゃなんだかんだで親友だと思える中に発展。

何があったのは知らないけれど、その日を境に彼女はカラフルな女の子たちの輪からはずれ、あたしと過ごすようになった。

喧嘩でも下のだろうかと思ったけれどそうじゃないらしく、今でも時々華やかな女の子たちの輪に入っていったりしている。

そんなときの彼女はあたしにとって一番遠くて、だけどそんなことといえなくて。

――あぁ、あたしはモノクロなんだな。

それを実感するときでもあったりする。

「またハルに追い掛け回されてるんだねぇ。まぁ、仕方ないよ。ハルはゆずはが大好きなんだから」

ケラケラ笑う真紀を恨めしく見上げる。真紀はそんな視線に気づいてか気づかないでか、そのまま言葉を続ける。

「付き合っちゃえばいいのに。せっかく自分を好いてくれる男性がいるのにさぁ」

ちなみにハルというのは岡野君のこと。
本名は岡野春（おかのしゅん）。春を訓読みしてハルというのが彼のあだ名だ。

「ゆずはがハルとかいった暁にはきっとあいつは教室中を走り回るよ」

人事だと思って。真紀は面白おかしそうに笑いながらいう。
そんな簡単な問題じゃない。目立たないあたしに目立つ彼が声をかけてくる理由なんてただひとつしかないだろう。
絶対、からかわれてる。
どうしてもそうとしか理由は考えられない。

岡野君があたしに構うようになったキッカケは本当些細なことだった。

＊＊＊

まだ二年になりたての五月。
あたしと岡野君はたまたま席が隣同士。
だけどお互いに関心を持っていなかったものだからまったく話したりすることはなかった。

睡魔のさしてくる5時間目。
昼食後の授業の睡魔は学生にとってもっとも手ごわい敵だと思う。

あたしの右隣に座っていた岡野君はすっかりその敵に完敗。スヤスヤ眠る姿には授業を受けようとする姿勢なんか微塵も感じられない。

筆箱からペンを取り出そうとしたとき、ふいに消しゴムに腕が触れて床に落ちてしまった。

拾おうと腕を伸ばした瞬間、あたしが拾うよりも早く誰かの手の中に小さな消しゴムは納まった。

『あ、ありがとう』

内心冷や汗をかきながら手を伸ばす。

お礼を言う声が震える。

怖い。だってまさかこの人に拾われるとは思ってはいなかったから。

『お、岡野……君？』

すぐに手元に帰ってくると思っていたのに、消しゴムはまだ拾い上げた持ち主の元。

それどころか拾い上げた岡野君の机の上に乗っている。

さっきまで寝ていたはずなのに、どうして消しゴムが落ちたことに気がついたのか。　はたまたどうして返してくれないのだろう。その机の上にあるものを勝手に取ったりしたら怒られたりするのだろうか。

でも、それはあたしのものだから怒られたりする分けないかな。

頭の中で疑問符が行きかう。そんなあたしに気づかないのか岡野君はメモ用紙をとりだしになにやら書き始め、そして消しゴムとともにあたしに渡した。

――放課後、図書室に来て。

男の子にしてはやけに整った字だな、感想はそうだった。

しかし今思えばなんてベタなやりかた。女の子に囲まれない日がないといわれる彼にしてはなんともかわいらしい。

もしも冷静なあたしならきっと行かなかったんだろうと思う。

だけどそんな小学生や中学生みたいな手を使う彼がちょっとかわいく思えて。

――魔が差したんだと思う。

言い訳がましいけれど、そうとでもいわないとあの日あの場所にいった理由が示しがつかないのだ。

『南ゆずはさん』

図書室には誰もいなかった。

ただ一人、いつも右側にいたあの男の子だけ。

『好きです』

『俺と、付き合ってください』

＊＊＊

「はぁ……」

いまさら後悔しても遅いということくらい理解はしている。
だけどあのとき冷たい女だと思われてもいくべきではなかった。
その気持ちにこたえられないのなら。

何より、あの日以来ずっと彼はあたしにあんな調子で絡んでくる。
図書室で感じた真剣なまなざしに少しだけ心は動いたけれど、でも所詮そこまでだった。

からかわれている。冷静になったあたしはそう思って、ただ一言『ごめんなさい』と小さくつぶやいて逃げるように帰ったのだ。

「おーいゆずはーーー」

あたしの重たい胸中に気がつかないこのノーテンキな男の子。

またあたしの憂鬱な一日は始まる。

本当、キッカケは些細なことだったのに。

3：初めての帰り道

この日、岡野春は手ごわかった。

「通して！」

「やだ」

放課後、真っ先に教室を飛び出そうとするあたしの腕を強くつかんできた男の子。

――もちろん、それは彼だ。

「今日こそ俺と一緒に帰ろう」

「無理」

視線が痛い。痛くてたまらない。
早くこの場所から立ち去りたいんだ。
お願い、その腕を放して。

何回も心で念じるのだけれど、あたしの願いは当然届くはずもない。

「一緒に帰って上げなよ。たまにはいいじゃん」

あきれたような口調でとても無責任な言葉があたしに降りかかってきた。

「えーっ！？　だって今日は一緒に駅前の喫茶店にパフェ食べに行くっていったじゃん！」

そう、今日は真紀と一緒にパフェと食べに行く予定だったのだ。新しくできたばかりの喫茶店のパフェはなかなか評判で、甘党のあたしはこのために今日を乗り越えてきたようなもの。

「じゃあ、ハルと一緒に行けばいいじゃん。ハルならおごってくれるよ」

真紀のさらに無責任な言葉があたしをちくちくと刺す。

そういう問題じゃなくて、彼と一緒に帰ったり、まして喫茶店でパフェなんか食べたりしたら目立つに違いない。

現に教室のど真ん中でこういうやりとりをしていること自体、十分目立っているのに。

「あーもうゆずははお堅いなぁ。中学生じゃないんだから、誰も冷

やかしたりしないって」

そんなこんなで、真紀にほぼ無理やりに押し付けられるような形であたしは初めてこの危険な男の子と帰ることになったわけなんだけど。

「て、手を離してくれないかな？」

終始ニコニコ顔に若干引きつつ、強く握られた手に視線を向けながらあたしはそういう。

あたしがそういえば言うだけ手を握る力は強くなる。

「はーーなーーしーーーーてーー！」

「やだ」

無理に両手でその手を押しのけようとすればするだけ、ムキになった岡野君はさらに力を強める。

だけど痛くない程度に。

それでもひるまないあたしは両手で手を離させようとする。

握られた右手は熱を帯びていて熱い。そしてなんか恥ずかしい。

いや、違う、恥ずかしくなんかない。何を考えているんだあたしは。

なんだかその右手があまりにも熱いから、あたしの中も少しおかしくなってしまうようだ。

ふいに手を押しのけようとしていた左手が岡野君につかまれた。

ちょうど校舎を出ようとしてたところで、玄関にはすでに人は帰ってしまったらしくあたしと岡野君の二人きりだ。

高鳴る鼓動。いつもみたいに早く離してって強気でいわないと。

頭では理解しているのに体が思うように動かない。

「ゆずは」

びくっと体が震えた。

目をそらしたくなるような視線を感じる。

「なんで、いつも逃げるの」

答えられなかった。

適当にごまかすこともできないわけじゃない。

だけどその真剣な眼差しに、答える答えがあたしの中にはなかったのだ。

「手……」

「そんなに、俺と手をつなぐのが、いやなのか？」

無意識なのかわからないけれど、握られた右手の力が強くなる。
少し痛いくらいで、顔をしかめると少しその力は緩んだ。

「だって、こうでもしておかないと、ゆずは、逃げるだろ？」

少しいつもと違う雰囲気に戸惑う。
次の瞬間には岡野君の顔が目の前にあって。

「っ……」

頬を両手で挟まれる。
そのたびにうるさくなる心臓。

「は、はなして……」

声がかすれる。
どうしようもないくらい、ううん、どうしたらいいのかわからない。

ただこの状況はすごくまずいんだろうと思う。

「ゆず、は……？」

驚いたような岡野君の顔。
だけど一番驚いたのはあたしだ。

「え……」

泣いていた。
頬に伝った生暖かい雫。
それはあたしの涙だった。

「……ごめん」

少し傷ついたような岡野君の顔。
あたしから体を離すと気まずそうに小さくそういった。

それからしばらくなんだか気まずい雰囲気が流れて。
だけど右手はずっと握られたままで。

拒むことができないまま、あたしは家まで送ってもらった。

「ゆずは」

帰り際、名前を呼ばれる。

あたしと家は正反対にあるはずなのに送るということを聞かない岡野君に押されてしまったのだ。

「好きだ」

唐突な告白。

反応に困ったまま固まっていると重たい沈黙が流れた。

その後ふっと笑い声が聞こえたかと思うと、暖かい大きな手があたしの頭をなでていた。

「おやすみ」

いつもと違う雰囲気に少々戸惑いながらも。

ぎりぎりのラインで境界線を超えられなくてよかった。心のどこかでそう安堵していたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7355i/

カラフル

2010年10月28日03時50分発行